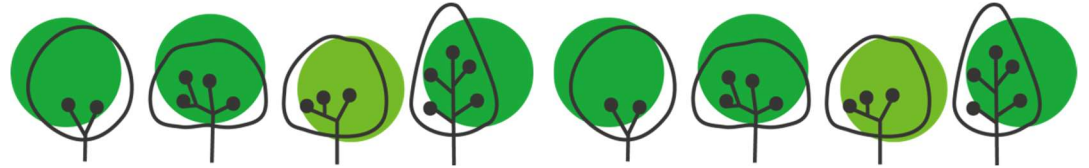




# 木地師のふるさと

vol.10



R4. 8 発行

## 木地師文化フォーラム開催！！



7月18日に東近江市愛東コミュニティセンターで「木地師文化フォーラム」を開催しました。新型コロナウイルス感染症の影響で3年ぶりの開催となりましたが、北は山形県から南は香川県まで、全国から木地師にゆかりのある方や関心をお持ちの方、約170名にご参加いただきました。今号ではその様子をお伝えします。



### ■ 作品展示

講演・対談に登壇いただいたスザーン・ロスさん、北野宏和さんの作品を会場ロビーにて展示しました。



北野宏和さんの作品

漆に関する資料

### 当日プログラム

- 挨拶 小椋 正清（東近江市長）
- 講話
  - 「木地師文化を育んだ東近江の森林」
  - 山下 直子さん（森林総合研究所関西支所森林生態研究グループ長）
  - 山崎 亨さん（アジア猛禽類ネットワーク会長）
- 講演
  - 「漆に魅せられて」
  - スザーン・ロスさん（漆作家/木地師）
- 対談
  - 「木地師文化と漆工芸の現在と展望」
  - スザーン・ロスさん（漆作家/木地師）
  - 北野 宏和さん（木地師）
  - コーディネーター：筒井 正（東近江市参与）

# 講話「木地師文化を育んだ東近江の森林」

東近江市をフィールドに森林資源の研究をされている山下 直子さん、猛禽類保護を通じた環境保全に取り組んでおられる山崎 亨さんに木地師の文化と森林保全についてお話しいただきました。

## ■木地師文化を育んだ東近江の森林の特徴（山下 直子さん）

7年前から東近江市で広葉樹の調査を行っています。東近江市には奥山（鈴鹿山脈）と里山（低山の山々）があり、小椋谷のある奥山にはブナ等の冷温帯の樹種、里山には亜熱帯の常緑針葉樹が多く、奥山里山に共通して人々の営みの中で燃料や建材等に使われてきたコナラやアカマツ等の植生があります。このことから、標高差による多様な樹種の存在と古くから人に利用されてきた履歴を読み取ることができます。

1900年に描かれた小椋谷の絵図や、滋賀県の潜在自然植生図を見ると、木地師が活躍していた頃の小椋谷では、現在人工林となっている部分も針葉樹や広葉樹など様々な植生タイプの樹木が存在する森であったことが確認できます。

古くから多様な植生があった理由は、小椋谷が太平洋側気候・瀬戸内気候・日本海側気候の3つの気候区が重なる場所に位置しており、各気候の色々な植物が生息できる地域であるためです。

木地の原木となるブナの林は、ブナだけでなく多様な樹種で構成されていますが、太平洋側に比べ雪の多い日本海側の森では、ブナの木が占める割合が高いという特徴があります。そのため、日本の木製品の需要がピークを迎えた16～17世紀に木地師は資源を求めて北に移動し、原木の多い地に留まったことで、日本海側気候の地域で木地産業が栄えたと言われています。



山下さんの講話の様子



東近江市での広葉樹のフィールド調査

## ■多様で豊かな鈴鹿の森を育んだ持続的で賢明な森林資源の活用（山崎 亨さん）

東近江市の面積の56%を占める多様で豊かな鈴鹿の森は、木地師文化の根源です。

鈴鹿の森の植物数は1800種類を超え、その植生を糧にムササビ、ツキノワグマなど様々な野生動物が息づいています。なかでも、天狗伝説の由来となり空の王者との異名を持つ狗鷲（イヌワシ）と、森の王者と呼ばれる熊鷹（クマタカ）の二種が生息していることは、世界的にみても非常にまれな森林です。



山崎さんの講話の様子

この生物多様性に恵まれた自然資源の宝庫は、生物の分布が分かれる西日本と東日本の両方の特徴を持ち、太平洋・日本海の気候区が入り乱れる地理的要因に加え、人々が賢明で持続的な森林資源の活用を行ってきたことで育まれてきたと言えます。

多種多様な広葉樹によって木地師文化が生まれ、森林が木地師の生活を支えるとともに、木地師による森林の活用が生物多様性の維持に貢献してきました。

多様で豊かな鈴鹿の森は、木地師文化をはじめとする森林文化を育み、湖東平野を潤し琵琶湖を養い、あらゆる生き物と人をつなげ、東近江市特有の原風景を創造しました。

日本は国土の70%が森林であり、資源豊かな奇跡の島国です。今一度、豊かで多様性に富む森林資源の重要性・価値を再認識し、取り戻していくことが大切です。



鈴鹿の森に生息する狗鷲（イヌワシ）



# 講演「漆に魅せられて」

石川県輪島市で漆作家・木地師として活躍されているスザン・ロスさんに、日本における漆文化と漆工芸の制作過程、また輪島塗りの魅力についてご講演いただきました。

## ■漆との出会い

イギリスで美大に通っていた頃の私は日本の文化に興味はなく、漆の存在も知りませんでした。しかし、たまたま訪れた日本文化展で、尾形光琳の硯箱に一目ぼれし、“このペンキを塗ってみたい！”と思ったのです（漆とペンキがまるっきり違うものだ気づくのは、まだ先のことです。）。それから本屋さんで本を探しても見つからず、日本大使館に聞いても漆について知っている人がいませんでした。



熱い想いを語るスザン・ロスさん

こうなったら日本に行くしかない。3カ月もあればマスターできるだろうと思って、日本に行くことにしました。しかし、そんなに甘くはありません。輪島で弟子入りを志願しても、日本語ができないことや女性であること等を理由に断られる中、漆の技術を教える学校（石川県立輪島漆芸技術研修所）があることを知りました。入学試験を受け研修所に入ったのは、日本にきて5年目。ようやく漆に触れることができました。

## ■日本の漆

日本での漆の歴史は古く、1万2千年前の漆の木の化石が見つかっています。縄文時代の衣服や土器にも漆が使われていました。



漆かきの様子

日本産の漆は丁寧に作られており、日本の気候にも合っているので、国宝の修理には日本産の漆が欠かせません。しかし、今は漆の生産は海

外が主流となり、日本の漆かきはどんどん減っています。輪島では80歳を超えた方が唯一の漆かきであり、有名な産地である浄法寺（岩手県二戸市）でも若い人はいません。漆の木は植えてから12年経過しないと採取できず、大変手間がかかり、漆かきだけでは生活できないのが実態です。

現在では、工房見学にくる学生でも漆が木から採れることすら知らないのが現状です。日本の伝統文化の一つである漆を日本人が知らない、その状況の中で漆が作られなくなっている現状を私はとても残念に思っています。

## ■日本の漆文化を守るために

今の日本人の暮らしは西洋化し、お椀を使って和食を食べることも少なくなって、漆に触れる機会が減っています。このままでは本当に日本の漆文化がなくなってしまう。

漆かきや漆製品を作るのに必要な道具づくりの職人が生活していくためにも、私は漆を身近なものとしてもっと使ってもらいたいと思っています。お椀にお味噌汁を入れるだけでなく、クッキーでも何でもよい、もっと漆器の出番を増やして、質の高い暮らしをしてもらいたいと思っています。



漆を使ったアクセサリー

私は若い人に漆を使ってもらいたいので、アクセサリ作りにも力を入れています。縄文時代の男性が漆を身に着けていたように、現代の男性にも使ってもらえるようなブローチも作っています。現代のニーズにあったデザインにすると同時に、高級品と思われがちな漆製品なので、手ごろな価格であることも大事だと考えています。

また、英語で酒は「さけ」のように、漆も「うるし」として、世界の人にも知ってもらいたいと思っています。私は海外に行く時は「URUSHI」の名前を覚えてもらうように伝えています。漆の訳語は「japan」ではなく、「URUSHI」として広めていきたいと考えています。

# 対談「木地師文化と漆工芸の現在と展望」

スザーン・ロスさんと、東近江市在住で木地師として活躍されている北野 宏和さんに対談いただきました。

大量生産による安価な食器等についてどう感じますか

北野 宏和さん：どういうものを使うかというのは、使い手の自由です。ただ、木のお椀を使うと、断熱性に優れていることや手触りが良いなど、モノの良さはすぐに感じてもらえると思います。

作り手として、木地製品の良さを伝えながら、木地製品が持つ良さを十分発揮できる技術を身につけることが重要だと考えています。



スザーン・ロスさん：お椀は「木」「漆」「作り手」の3つの魂がコラボレーションして作り出されるもので、お椀を使うとそれぞれの魂が使い手に伝わると思っています。工場製品からは、その魂を感じません。

現代の日本は高度な情報化社会となり、様々なスピードがどんどん速くなっています。美しいお椀で美味しいごはんを食べるとき、お椀や食べ物、その時間を味わうために、ゆっくり食べたいと思います。そんな時間を日常の中に持ってほしいと思っています。

スザーンさんから北野さんへの質問

スザーン・ロスさん：これからの夢は何かありますか？

北野 宏和さん：木地師として賞をとりたいなどの思いはありますが、奥永源寺に来ると木地師の仕事があるという状態にしたいと思っています。職人として生きていくためのレールや生活基盤を作りたいです。



対談の様子

## 9月18日（日）

## 東京上野で「木地師シンポジウム」開催決定！

詳細・申込方法は本ニュースレターに同封しているチラシをご確認ください。



## 木地師のふるさと 東近江市

発行：東近江市企画部企画課

〒527-8527 滋賀県東近江市八日市緑町 10 番 5 号

TEL（代表）0748-24-1234 （直通）0748-24-5610

FAX 0748-24-1457

Email [kikaku@city.higashiomi.lg.jp](mailto:kikaku@city.higashiomi.lg.jp)

Facebook <https://www.facebook.com/higashioumi.kijishi>

（Facebook では随時、お知らせ等を行っています！！）

市 HP



Facebook

